

裸体

息の白

霜の白を

焼くような

日の控える東雲

剥き出しの心に映る  
裸の幹

冬の人よ

一糸纏わず

凍てつく大地に

枯、として立ち

その枝は

空に広がる毛細血管

やがて来る萌芽を待ち

ついには

その漲る気にも

斃れぬ身体を手に入れたのだ

対峙したその姿を

がりがりり

幼気な肌に刻みつける

冷ゆる風

それさえも燃え

赤く

赤く

東ひむかしに朝が来る

## 星を乞う人

おおこの狭い天蓋になお  
疎らな星の

何たる叙情歌

星の下で命は

一片の不実もなく一人

その宙の

純化した黒

真の闇へ

姿を消すその日まで

星は懸命に輝いて

それを寂しいとはいわない

きらきらと

命は寂しい

命は揺れて

星の下でふるえ哭く

その煌めきが

清けき音が

宇宙の中では響きあう

## 秋の女神

私は佇む  
果樹園の果樹  
この胸にぶら下がる  
二つの乳房  
大樹の未来を胸に  
下腹部に思いがある

私は女なりしもの  
母なりしもの  
遍く大地に果実を落とす  
種子を抱いた慈愛の実

私だけの痛みがあり  
私だけの涙がある

私は女なりしもの  
母なりしもの  
四季と交歓し  
大地を彩り  
潤し続け  
育み続け  
何時の日か  
枯れた乳房を胸に  
大地へ還る

私は女なりしもの  
母なりしもの  
やがては朽ち果て  
過去となる